

11. 脈絡叢イメージングにおけるダイアモックスの影響

駒谷 昭夫 福田 和雄
山口 昂一
(山形大・放)

Pyrophosphate(Sn)前処置による Choroid Plexus Scintigraphy の方法と臨床応用については1977年に、臨床的意義については1979年にわれわれは報告を行なった。その後、CT が普及した現在においては形状だけでなく、濃度や集積速度をコンピュータで定量的に解析することにより、choroid plexus の機能を評価できるかどうかの検討を行なった。

今回は、髄液の産生を抑制すると言われている Diamox® 負荷を併用した choroid plexus Scintigraphy を行ない、PDP-11/34 に入力、解析を行なった。

犬に髄液産生率を40~50%抑制するといわれる量の Diamox®, 0.2 g/kg を併用した場合、抑制しない時と比べ1時間後の時点で約20%増の測定値が観察された。この現象のメカニズムについても更に例症を重ね検討を進めたい。

12. 血中胆汁酸の Radioimmunoassay とその臨床診断学的意義 第1報——コール酸の測定

村井 隆夫 飯塚 美伸
粕川 礼司
(福島医大・2内)
斎藤 勝
(同・RI)

血中胆汁酸の測定は、肝の機能状態を敏感に反映する検査法として最近注目されてきているが、手技が煩雑なためルーチン化が遅れていた。今回われわれは、胆汁酸に特異的な抗体を用いた Radioimmunoassay 法による簡便な血中胆汁酸の測定を経験したので報告する。

対象は、健常成人16名と福島医大第2内科で治療中の各種肝疾患患者72例で空腹時(4時間以上

摂食中止例)に採血した血清を試料に用いた。胆汁酸の測定はアボット社の CG-RIA キットを用い BF 分離に PEG を利用する沈殿法 RIA で行なった。検体はすべて二重測定を行なった。

健常人の空腹時グリコール酸(CG)濃度は $18 \pm 10 \mu\text{g/dl}$ で、正常値上限は $\bar{M} \pm 2 \text{DS}$ で $38 \mu\text{g/dl}$ 以下とした。血中 CG 値上昇は急性肝炎19例中11例58%、慢性肝炎活動型22例中17例77%、慢性肝炎非活動型18例中8例44%、肝硬変12例中11例92%で上昇が認められ、慢性の肝病変では障害の進行度を反映する傾向がある。

急性肝炎ではある程度黄疸の消長と平行した変動を示す。通常の肝機能検査法との対比では、血中 GPT 値、血中 Bilirubin 値、血中 GOT 値、血中アルカリフォスファターゼ値、ICG 15分停滞率の順ですべて正の相関を示し、さらに上記の通常の肝機能検査法では異常を示さなかった肝疾患患者でもかなりの例で血中 CG の上昇が認められ、肝機能検査法としてはより鋭敏な方法であると考えられた。今後 CG 以外の胆汁酸並に各種負荷試験などについても検討を加える予定である。

13. In vivo 検査後の血中 RI が in vitro 検査に及ぼす影響 第2報——甲状腺摂取率について

及川 昭弘
(岩手医大・RI)
中村 悟 及川 恵子
(同・中検)
今野 真人 柳澤 融
(同・放)

RI が残留している血液で甲状腺 T-3 摂取率を測った場合、検査値がどう変動するかについて、今回はレジンスポンジ法とレジンストリップ法を用いて、Pool 血清を使った基礎実験を報告した。

pool 血清に、 ^{131}I -標識試薬 (NaI, PVP, アドステロール, 馬尿酸ソーダ) ^{67}Ga , ^{75}Se , ^{111}In を混入し、レジンスポンジ法では $500 \mu\text{l}$ の sample 血清、レジンストリップ法では $50 \mu\text{l}$ の Sample